

イレズミという対象との距離感に関する一考察： 齋藤卓志と山本芳美のアプローチを比較して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学通信教育部 公開日: 2024-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤岡, 美香子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000247

イレズミという対象との距離感に関する一考察

— 斎藤卓志と山本芳美のアプローチを比較して —

藤岡 美香子

はじめに

藤岡(2023)において筆者は、文化人類学者山本芳美氏と国文学者松田修氏のイレズミに対する姿勢を比較することで、日本におけるイレズミの社会的受容の一端を明らかにすることを試みた。それに続く本研究は、山本芳美氏と民俗学者斎藤卓志氏のアプローチを比較し、その共通点と相違点を明らかにしようとするものである。

松田は、「異端」「無頼」「闇」「負」が日本刺青の魅力とし、社会性がないことが日本刺青の本質であり、異端とされることこそが日本刺青の本望、刺青は社会性を「放棄している」、日常生活に溶け込んだ「明るい刺青は滑稽だ」という立場をとる。一方山本は、文化人類学者の立場からタトゥー研究に入り、人間に根源的に組み込まれた行為であるにもかかわらず、イレズミが原因で異端視され、社会的弱者となって周辺に追いやられてしまった人々への目線を持ち、イレズミの社会性は「奪われている」のであって、回復を試みる必要があるとの姿勢をとる。

本研究で取り上げる斎藤と山本は、2002年に『タトゥーの魅力を探る』というテーマで対談している。その中で斎藤は、「民俗調査をする中で、自分以外に刺青をテーマに書く人はいないだろう」という思いを持っていたことを明言するなど、筆者は、両者が日本のイレズミ研究における先駆者に分類されると考えている。両者は、イレズミが「魅力的なもの」という認識では一致し、ともにイレズミの社会的受容に前向きな立場を取るが、距離感には相違がある。山本はタトゥー研究から始め、外国との交流によるイレズミの変遷という独特のイレズミ観を持つ。他方斎藤は、イレズミ固有の倒錯的な美という、松田修の刺青観にも通じ、また山本が触れなかった特徴を直視しているが、それが必ずしも

反社会性には繋がらないということを民俗学的立場から主張している。

斎藤は『刺青』(1999)、『刺青墨譜 なぜ刺青と生きるか』(2005)の出版、山本は『イレズミの世界』(2005)、『イレズミと日本人』(2016)を刊して以来となる著書を、同じく2022年に出版した。本研究では、斎藤と山本のイレズミ観、イレズミという対象への姿勢がそれぞれの前著から最近著までの期間にどう変化し、深まったのかを比較する。その比較により、イレズミ・タトゥーが現代日本においてどのように受容されているかが明らかになり、また、今後のイレズミ・タトゥー研究の可能性と課題が見えてくると期待できると考えている。

1. 研究対象2氏について

1.1 斎藤卓志(1948-)

民俗学者で、元安城市学芸員。入れ墨を扱った3冊の書籍『刺青』(1999 岩田書院)、『刺青墨譜 なぜ刺青と生きるか』(2005 春風社)、『人は入れ墨を見て顔を見る』(2022 風媒社)の他、単著論文「肌色のキャンバスに描かれるタトゥー、第二の肌色」(2000)や山本との対談「タトゥーの魅力を探る」(2002)において入れ墨観を述べている。

自身の入れ墨との出会いについては、「入れ墨に魅入られた者はたいがい入れ墨との初体験を覚えているが、私にはその初体験がない」とし、高校時代に通学電車の中で見つけた着物姿の男性の胸元の入れ墨という、「劇的な出会いではないこの出会い」をきっかけに、「入れ墨に心が占領」されていくこととなった(斎藤2022:110)としている。斎藤を引きつけているのは、入れ墨の是非や歴史的な流れではなく、人間と入れ墨の間にある、入れ墨の存続を可能にする何かを追求したいという、入れ墨の本

質への探求心であると言える。

「文身」「刺青」「入れ墨」「入墨」「彫り物」「タトゥー」など様々な表現、呼び方がある中、斎藤は前2著においては「刺青」を用い、最近著では「入れ墨」を選択しているため、本稿における斎藤のイレズミ観の考察では「刺青」「入れ墨」が混在している。

1.2 山本芳美 (1968-)

文化人類学者で都留文科大学比較文化学科教授。大学在学中にイレズミをはじめとする身体をめぐる文化の研究を始め、修士論文『南島のイレズミ論—イレズミに関する社会・民俗誌的研究』(1993 明治大学)、学位論文『イレズミの近代史—日本、台湾、沖縄、アイヌにおけるイレズミ禁止政策』(2000 昭和女子大学)をまとめる。

山本は、割礼、纏足、首の伸長などに並ぶ、身体変工の1つとしての台湾や沖縄のイレズミを研究のスタート地点とし、その後日本のイレズミの世界にアプローチした。政治的、宗教的理由から禁止された時代を経ても常に世界の片隅に存在し続けるイレズミは、「人間に根源的に組み込まれた行為の1つ」(山本 2005:285)として捉えている。近著『身体を彫る、世界を印す イレズミ・タトゥーの人類学』では、タトゥー人気と先住民族の文化復興運動活発化の中での、知的財産権や文化の盗用に関する問題の存在を提起し、今後のイレズミ・タトゥー研究の方向性や広がりの可能性を示している。

山本は「イレズミ」という表現を選択して用いていることを踏まえ、本稿での山本のイレズミ観の考察には、文献からの引用など特別な場合を除き、「イレズミ」を用いる。

2. 斎藤卓志の3著書の構成

2.1 『刺青』の構成

「歩く」「見る」「聞く」という民俗学の手法を踏襲し、彫師のもとで作業を見学した記録であり、「彫師」「客」「見る人」への聞き書きである。その中では、彫る作業、技術、道具、意匠についてもまとめられており、特に「日本刺青の青」「ぼかしの手法」といった日本刺青特有の美がどう作り出され

るのかについて詳細に記述しているが、これは「耽美さは解しない。性的にも何も感じない」(山本 2016:176)と認めているように、本稿において比較研究を行う山本がそれほど興味を持っていない刺青の側面である。

本著の中で斎藤が追求したのは、「人のやってきたことで意味なくあるものはない」という民俗学者柳田国男に倣い、「個人的なこと」「個人の好み」では片づけることができないと考える、刺青を入れる理由である。斎藤は、「刺青はつきつめると、彫師、客、刺青を見る世間の3者の心の中に潜む心象」であり、また、「聖俗2つの側面を持つ身体表現である刺青を理解することは、日本の近代が身体に関わる文化の何を否定してきたのかを探る手掛かりにもなる」と考え、3者に会うために歩き、彫る作業を見て、話を聞いている。

2.2 『刺青墨譜 なぜ刺青と生きるか』の構成

「刺青と人間の間、刺青を存続させる何があり、なぜそれがあるのか」という『刺青』で扱ったテーマの答えを求めて、加筆した増補版である。この6年前に刊行された『刺青』について斎藤は、聞き取りによって刺青を持つ人の本音を聞いても、聞く側の自分に受け止める力がなかったことと、人間にはいろいろな顔があり、刺青を持つ人自身が自分の本音がわからないことが少なくないという理由で「核心に届いていなかった」(斎藤 2005:7)と振り返っている。本著は、その核心、つまり、刺青の存在理由を明らかにしようと、現代の刺青と習俗としての刺青を改めて追求した書であると言える。

2.3 『人は入れ墨を見て顔を見る』の構成

「人はなぜ入れ墨を入れるのか?」という、斎藤の一貫した問いに答えるために書かれた本書で、入れ墨を入れた人との対話という民俗学の手法を繰り返しながら、前2作の探求の答えを、次の3つのテーマに分けて提示している。

1) 入れ墨の動機：身体変工の最も大胆な形態である入れ墨を決心させる究極的な動機として、斎藤は「見る側」「見せる側」の間に存在する性の意識と、入れる人の「変えたい」という思いを想定している。

2) 松田修氏との比較：入れ墨と性の関係を考察した第一人者として松田に言及するが、松田のあまりに文学的で観念的な入れ墨観が自分の民俗学的手法にそぐわないと考える。

3) 風俗習慣の入れ墨に関する考察：齋藤は大学で民俗調査の研究会に所属し、沖縄やアイヌの入れ墨にも造詣が深いが、最も関心を寄せるのは民族の伝統文化ではなく、個々人が入れ墨を入れる動機であり、そこにも「性的なシンボル」「羨望・尊敬を得る装置」という側面を見出し、注目している。

2.4 齋藤の入れ墨観の変化

『刺青』にある客へのインタビューでは、刺青を入れる理由は、「我慢」「自分を変えたい」「自信をつけたい」という、自分への挑戦、自己の開放、成し遂げた後の自信・達成感が挙げられ、「性」に関する表現はない。彫師からは、「見せてこそその刺青」「どう見せるかに日本人の美意識が働く」という表現に加え、「日本の刺青は色気があり、セクシー」という評も得ている。しかし、『刺青』の後半で齋藤は「総身の刺青は、江戸っ子の粋や難波の我慢に支えられていると言われても納得いかない。粋の表現は官能を刺激し、我慢という男気に、女は男の性を感じ取るのではないだろうか」（齋藤 1999：218-219）として、「男の刺青に性愛と同じ反応をした女性」や「刺青を入れた身体からは男の匂いがするという女性」がいるという伝聞レベルでの存在を例示して、刺青と性を結び付けている。論の展開から、齋藤自身が刺青の存在理由に性的な魅力があると理解している、または、そう理解したいとこだわっていることが伺える。

筆者は、齋藤が『刺青墨譜』で「自分に受け止める力がなかった」と述べているのは、この「性」「色気」「セクシーさ」といった表現を、刺青を求める客から引き出せなかったことへの後悔やふがいなさを示している可能性があると考えられる。また、「本人も知らなかった潜在的な動機」として「性」があるにもかかわらず、本人にその自覚がなく、それを言葉で表現することがないのではないかと分析しているとも考えられる。

『刺青墨譜』の17年後に出版された『人は入れ墨を見て顔を見る』においても、仮装や化粧と同様

に、入れ墨にも「自己規制をとっばらい逸脱する快感」という「変わるということの本質」が備わっている（齋藤 2022：122-123）とまとめ、『刺青』で刺青を求める客から引き出した「自分を変える装置」という刺青の存在理由を認めている。しかし一方で本著では、「入れ墨と一番近い言葉は『性』だと考えている」（齋藤 2022：108）と明言し、小学3、4年生の頃に見た女性の紅い爪がずっと心に残り、「赤は私の中の性的好奇心であり、性のめざめ」であり、赤への関心により、後の人生で入れ墨本を2冊書くことになった（齋藤 2022：140）と認めている。齋藤にとって「赤」＝「性」、それが入れ墨に繋がる、つまり、「入れ墨」＝「性」という解釈を長年続けてきたことを示し、本著では聞き取りで得られた多くの言葉を用いてこの主張の論証を進めている。加えて、『南嶋入墨考』『菅江真澄とアイヌ』『沖縄の入墨（針突）』『奄美の島々・文化と民俗』などの文献から、習俗としての入れ墨にも、それ以外の入れ墨と同様に、見る者と見せる者の間にある「性」「羨望・尊敬を得る装置」、入れ墨を持つ人の中にある「入れることを楽しむ感覚」「入れ墨の魔性」の存在を見ており、それは『人は入れ墨を見て顔を見る』における大きな特徴だと考える。

1999年出版の『刺青』から2022年の『人は入れ墨を見て顔を見る』まで20年以上、齋藤は一貫して「刺青を入れる理由」「刺青が存在し続ける理由」を追求している。日本刺青の性的な魅力という、当初から齋藤の中におぼろげに存在したと考えられる問いの答えを、より確実に確定的なものにするために、彫師、客、刺青を見る社会から根拠となる言葉を聞き取り続けてきた。その意味において、齋藤の刺青との距離感は「刺青と性愛」との結びつきをより深く追求する、一点集中型の深さを有するものだと言えると考えられる。

3. 山本芳美の3著書の構成

3.1 『イレズミの世界』の構成

学生時代から博士論文に至るまでの研究課題である「日本や台湾をフィールドとしたイレズミの文化人類学的な調査」をまとめたものである。古代から近代までの日本と、沖縄、アイヌ、台湾など日本周

辺の先住民族におけるイレズミの風習を、文献と当事者への聞き取りを通して解説している。イレズミの文化人類学的な研究方法や現代タトゥーにも触れているが、イレズミの今日的課題への直接的な言及はない。

3.2 『イレズミと日本人』の構成

『イレズミの世界』出版後の10年間で、公務員のイレズミ規制、医師免許のないアートメイク、イレズミをした人の海岸や温泉への立ち入り規制など、日本社会においてイレズミの扱いをめぐる大きな変化があった。この状況に対応し、「前著では比較的薄かった日本の戦後から現時点までの、イレズミについての動向」(山本2016:216)として、イレズミ=やくざのレッテル貼りにつながった日本のやくざ映画の隆盛、イレズミを支えた近代の職人文化、世界的なタトゥーの流行を中心に解説している。本書において、現代社会の中でイレズミが抱える問題やイレズミの社会性という課題が、山本のイレズミ研究のテーマに加わったことが明らかとなっている。

3.3 『身体を彫る、世界を記す イレズミ・タトゥーの人類学』の構成

山本芳美を中心とした本論文集で氏が意図したのは、氏の世代の研究者と若手研究者を繋げて、イレズミの学術的研究の道筋をつくることである。日本編の4編中2編で若手研究者の論文を掲載し、氏の論文を含む2編においても、内容に現在のイレズミ研究の成果を補足している。世界編の4編はすべて山本と同世代の著者による論文であるが、タイやアフリカなど、従来の研究で取り上げなかった地域の研究論文も掲載し、イレズミ研究の広がり強調するものとなっている。以下は、本書に掲載されている研究論文の概要である。

「ヴィクトリア朝イングランドにおける『芸術的な』日本のイレズミと商業戦略」(マット・ロダー著 大貫菜穂訳) :

開国以来、輸出需要増加への対応で多くの日本美術工芸品の質が低下する中、真正な日本の芸術形態を保ったイレズミが、「西洋の想像力の中で、正当な装飾性を備えた芸術形態として、真に適切かつ賢

明に理解され、また、英国のイレズミを専門職へ押し上げる役割も果たした」(山本他2022:241)ことを示す文献研究。

「沖縄のハジチ(針突)とその調査史 資料蓄積を活かすために」(山本芳美著) :

20世紀初頭からの奄美・沖縄でのハジチの施術概要とその調査史を振り返り、70年代から90年代の博物館や教育委員会による調査についてまとめ、その結果蓄積された膨大な資料の有効活用法を提言している。

「関係性としてのタトゥー 千葉市でヒップホップファッション・ストアを営む若者たち」(山越英嗣著) :

ストリートファッションの商店を経営する若者たちのタトゥーが日常生活の中で持つ意味合いを考察し、「個人的な経験」「個人に帰属する表現」として理解されることが多い現代社会のタトゥーの中で、帰属意識や通過儀礼の表象という意味合いが強いつい結論に至る。

「『消えるタトゥー』はタトゥーごっこか らしさとらしくなさをめぐって」(松嶋冴衣著) :

消えるタトゥーである「ジャグアタトゥー」を日本社会において選択する意味は、一般社会に身を置きつつ、リアルタトゥーが持つ「社会や規則からの自由」という肯定的な価値を得るための手段であることを聞き取りを通して証明している。

「顔を横切る黒い帯 マルケサス諸島の文様の変容」(桑原牧子著) :

18世紀から20世紀の間のマルケサス地方のイレズミの形状、特に顔面に刻まれた文様の変容と社会の様相との相関性の分析を試みた文献研究。

「ニュージーランド・マオリのタトゥー、タ・モコの復興」(秦玲子著) :

マオリの伝統的なタトゥーであるタ・モコが断絶に至る歴史、ギャングが纏うタトゥーとの対立などを経て、タ・モコが美しいマオリ文化としての地位を再び確立するまでの過程を追う。

「より善い人を生み出すイレズミ」（津村文彦著）：

ヒンズー教に関連する図形や文字、数字を幾何学的に配置したヤントラを図案にしたイレズミであるサックヤンの実践現場を調査し、「宗教性」「暴力」という両義性が生まれる実情を明らかにしている。

『『今』の楽しさと関係を刻む人々 カメルーン東南部の狩猟採集民バカのテレ』（彭宇潔著）：

カメルーンの狩猟採集民のイレズミであるテレについて、フィールドワークをもとにその特徴を論じる。通過儀礼や社会的組織を表すものである、他のアフリカ社会のタトゥーに対し、テレの模様や施術現場の即興的で開放的な雰囲気から、イレズミを含む身体変工には必ずしも理由が存在するわけではないとまとめている。

3.4 山本のイレズミ観の変化

日本国内外の先住民族のイレズミの風習を対象として始まった山本の研究は、元々日本の伝統的なイレズミそのものには強い興味を持っておらず、外国との接触や外国文化が日本のイレズミにどう影響し、どのような変化をもたらしたかという側面に、日本のイレズミに対する興味は絞られていた。

しかし、2005年以降日本において、イレズミに関係する社会問題、特に、日常生活におけるイレズミ規制に関する議論が盛んとなり、裁判で争うような問題も起こった。現代日本におけるイレズミの社会的受容状況を危惧した山本は、先住民族のイレズミの風習という枠を超えて、現代社会におけるイレズミ・タトゥーという存在を追求するために、日本のイレズミの歴史を詳細に紐解き、反社会性と結びつけられ、社会からの排除されるのは正当性がないということを強く主張し、イレズミ・タトゥーの社会性の回復を目指すこととなった。彫師が、医師免許を持たずにタトゥー施術をしたとして医師法違反で起訴され、無罪を訴えた2015年の裁判では、弁護側の証人として法廷で「タトゥーをモチーフにしたファッションが世界的に流行していること、イレズミの復興が先住民族の文化復興の主軸であることなどを踏まえると、イレズミを『悪』や『イレズミは悪い人がするもの』とのみとらえるのは、成熟した市民社会を目指すあり方として疑問を抱かざる得

ない」（小山他2020：250）との提言を行うなど、山本のイレズミ・タトゥーとの距離感は社会性の強いものとなっていく。

日本におけるイレズミ・タトゥー研究は、いまだ研究分野として確立しているとは言えない。山本が著書や対談の中で複数回述べているように、イレズミ・タトゥーを研究対象とすること自体に批判的な意見もある。山本の最近著『身体を彫る、世界を記す イレズミ・タトゥーの人類学』は、若手研究者や今後イレズミ・タトゥーを研究対象とする可能性のある人々に対して、研究の進め方や研究資料の入手方法などを指南し、イレズミ・タトゥー研究の分野を確立させて、次の世代に引き継いでいきたいという姿勢が形になっており、山本の研究における「公共性」が強く表れていると考える。

4. 齋藤と山本の比較「深さ」と「広がり」

齋藤の刺青の存在意義・理由を探す約25年の歩みは、個人的、かつ自身が求める答えが出てくることを期待し、そしてそれを裏付けていく営みであったと筆者は考える。最近著においては、齋藤自身を納得させるだけの根拠となる発言が「彫師」「刺青愛好者」「見る人」の3者から十分に引き出せ、それらをまとめており、齋藤の刺青との距離感にこれ以上の変化や深まりを期待することは難しいと言えるだろう。いわば、『人は入れ墨を見て顔を見る』は刺青の存在意義を明らかにし、深めてきた、齋藤の歩みの集大成であり、終着点だと考える。

一方、山本は先住民族のイレズミ研究をスタート地点とし、その後、日本社会を含めた、現代社会におけるイレズミ・タトゥーに十分な社会性が認められていない状況を憂い、現状を変えるための主張を続けてきた。また、山本が最近著で紹介している各研究者のイレズミ・タトゥー研究の切り口の豊富さを見ても、現在の山本のイレズミ研究が有する広がりには疑いようがない。マルケサス諸島、ニュージーランド、タイ、カメルーンと対象地域に広がりがあり、また、現代社会における若者を中心としたタトゥー人気も研究対象とするなど、テーマにも多様性があり、今後もその傾向は強まっていくと予測される。一方、学生時代に始まり、現在に至る山本の

イレズミ研究の経緯を見ると、日本のイレズミについては距離をおいていると言える。

齋藤も、風俗習慣としての入れ墨にも造詣が深い、「私にとっての入れ墨は、入れているその人にとってどういうものとしてあるか、どのような隠れた役割をもっているかである。生活の中でというのがベースである」(齋藤 2022: 111) と述べているように、入れ墨を持つ人と社会の関係よりも、入れ墨とそれを持つ人との関係、つまり入れ墨を入れる動機が関心の対象であり、最終的に、日本伝統の刺青も習俗の刺青も「性」に集約していくという深さが際立っている。

齋藤と山本という日本のイレズミ・タトゥー研究の先駆者である2人の比較から見えてくることは、どこかドライで、空間的にも、時間的にも、広くイレズミの本質を追求する山本と日本刺青という存在にこだわり、その本質を深く追及する齋藤の姿勢は、相互補完的であるということだ。研究対象の側面を深く追及する姿勢と様々な側面を明らかにしていく取り組みは、研究活動全般に存在する違いである。山本が目指すイレズミ・タトゥー研究のアカデミズムとしての確立のためには、山本の研究の「広がり」と齋藤の「深さ」はどちらも必要不可欠なものであろうと考える。

おわりに

本稿では、齋藤卓志と山本芳美の著書に見られる論述から、それぞれのイレズミへの姿勢がどう変化してきたのか、そして2人のイレズミとの距離感の違いと今後のイレズミ・タトゥー研究との関係性を論じてきた。この20年近くの間、日本社会におけるイレズミ・タトゥーの存在感は増した。それは、イレズミ・タトゥーを持つ人が増加し、イレズミ・タトゥーに関係する社会問題が起きたことで、現代社会でどう認識され、今後どのように受けとめていくべきなのかの議論が活発になってきたからである。その間山本が、歴史の中で失われたイレズミ・タトゥーの社会性の回復を目指しつつ、研究対象としてのイレズミ・タトゥーの社会的地位の確立を目指してきたことは、本稿で論述してきたとおりである。一方、齋藤は、人がイレズミを入れる動機

を追い続け、その動機を「性」に集約して、その追求は終わったと言える。

社会的排除をめぐる裁判結果から、イレズミ・タトゥーの社会での受容が進む可能性があることは示唆される。また、イレズミ・タトゥー研究を後進に託そうとする山本の論述からは、研究分野としてすでに確立されているとは言い難い。しかし、この状況は逆に、イレズミ・タトゥー研究に大きな可能性、様々なアプローチの方法があることを示しているとも言える。イレズミ・タトゥーとは人間にとって一体何であるのか、に興味を持つ者がそれぞれの視点から取り組むことが、イレズミ・タトゥーの本質を明らかにすることに繋がっていく。

参考文献

- 小野友道 (2010) 『いれずみの文化誌』 河出書房新社
 小原一夫 (1962) 『南嶋入墨考』 筑摩書房
 小山剛・新井誠 編 (2020) 『イレズミと法 大阪タトゥー 裁判から考える』 尚学社
 齋藤卓志 (1999) 『刺青』 岩田書院
 齋藤卓志 (2000) 「肌色のキャンパスに描かれるタトゥー、第二の肌色」『化粧文化』 40 pp.77-79
 齋藤卓志 (2005) 『刺青墨譜 なぜ刺青と生きるか』 春風社
 齋藤卓志 (2022) 『人は入れ墨を見て顔を見る』 風媒社
 齋藤卓志・石川三千郎他 (1997) 『職人ひとつばなし』 岩田書院
 齋藤卓志・山本芳美 (2002) 「対談 タトゥーの魅力を探る」『化粧文化』 42 pp.62-73
 堺比呂志 (1997) 『菅江真澄とアイヌ』 三一書房
 新屋敷幸繁 (1968) 「沖縄の入墨 (針突)」『沖縄国際大学紀要』 5巻7号, 8号
 谷川健一 (1975) 『女の風土記』 読売新聞社
 昇曙夢 (1965) 『奄美の島々・文化と民俗』 奄美社
 藤岡美香子 (2023) 「日本のイレズミ観の形成と社会性への脱皮に関する一考察—日本のイレズミ観はどのようにしてゆがめられたのか—」『人間学研究論集』 第12号 pp.33-41
 松田修 (1972) 『刺青・性・死—逆光の日本美—』 平凡社
 松田修 (1989) 『日本刺青論』 青弓社
 山口政五郎 (1996) 『鳶頭政五郎覚書 とんびの独り言』 角川書店
 山本芳美 (2005) 『イレズミの世界』 河出書房新社
 山本芳美 (2016) 『イレズミと日本人』 平凡社新書
 山本芳美他 (2022) 『身体を彫る、世界を記す イレズミ・タトゥーの人類学』 春風社